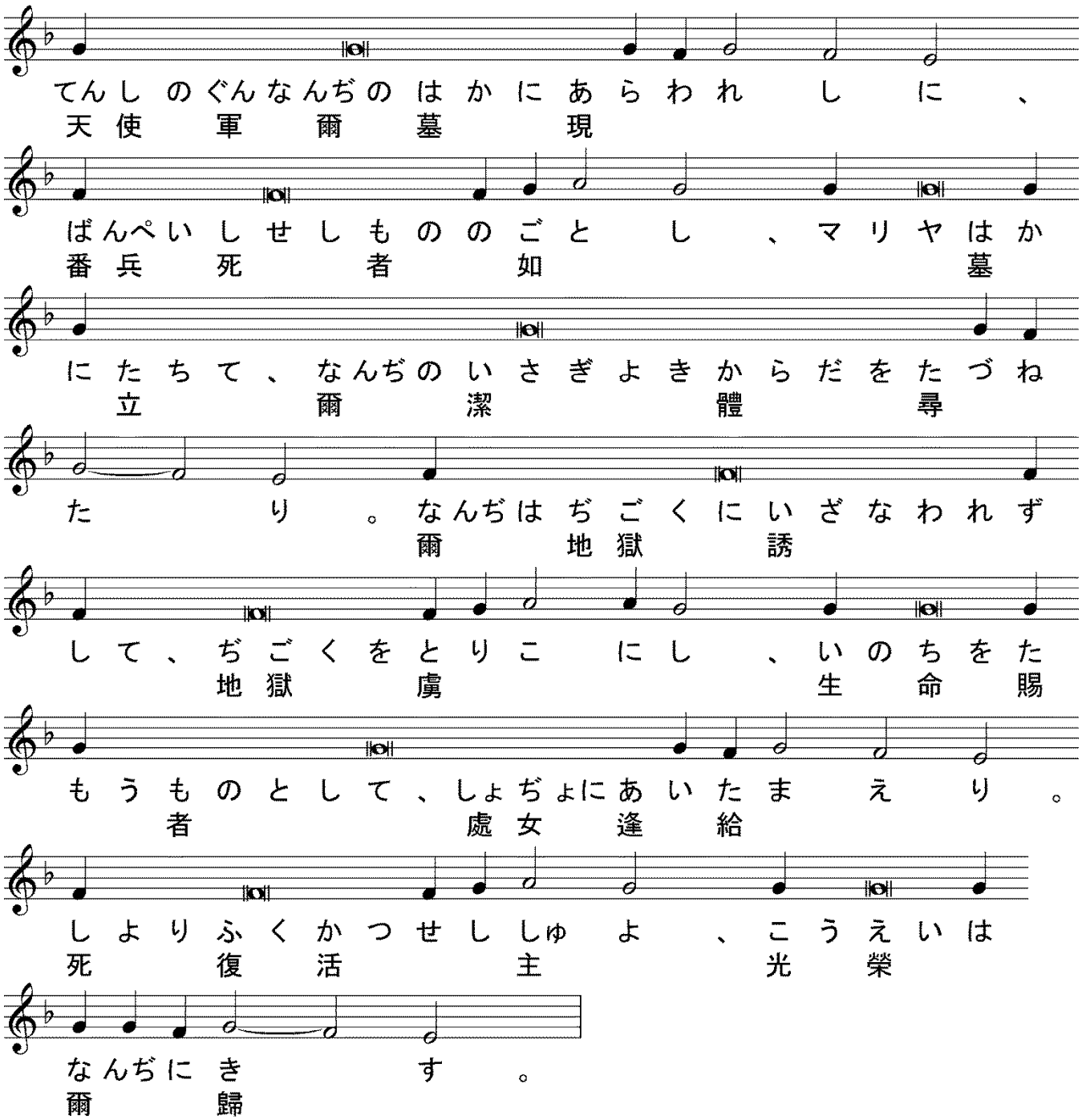
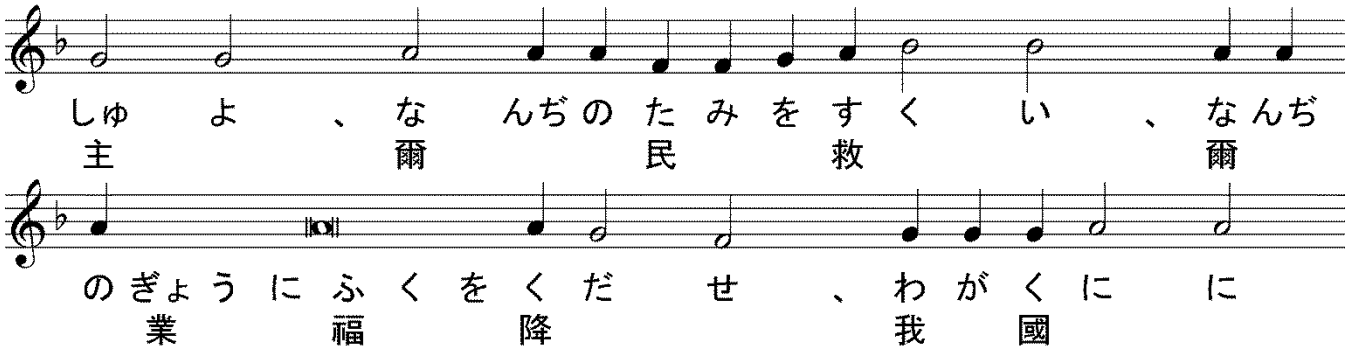
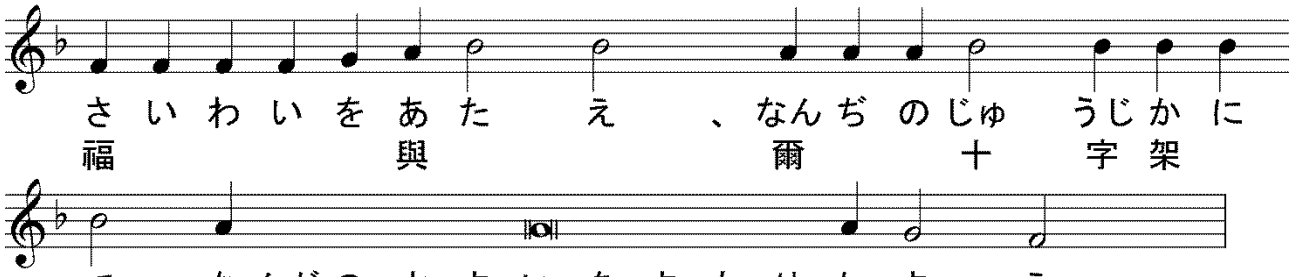
【　復活讃詞　第６調　】

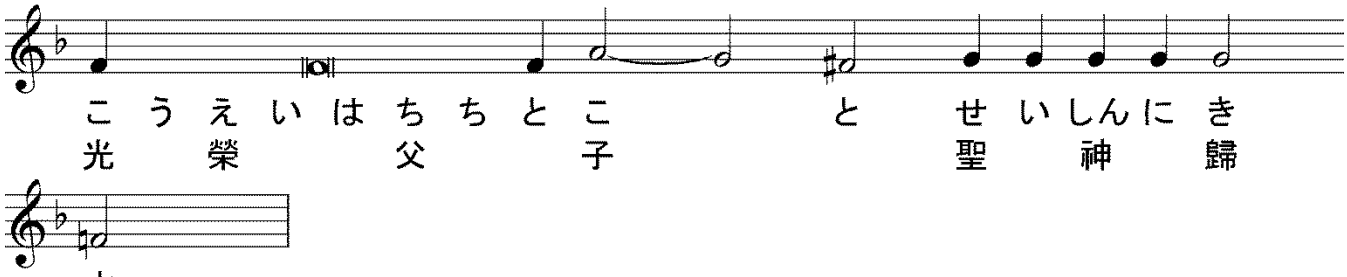


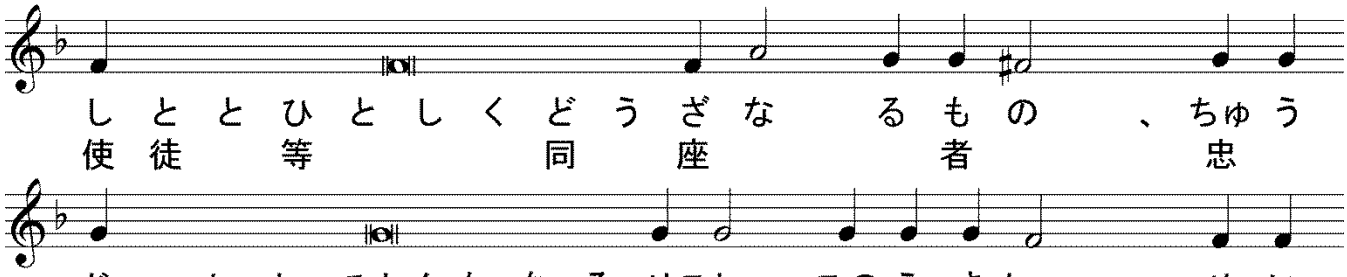
【　十字架擧榮祭の讃詞　第１調　】

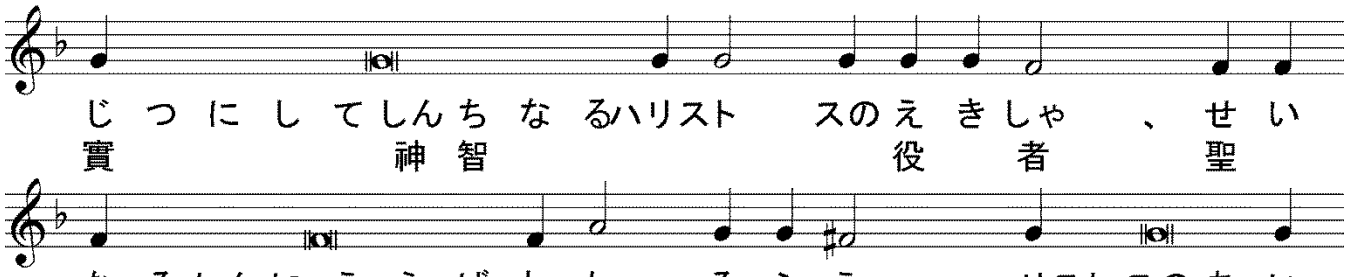


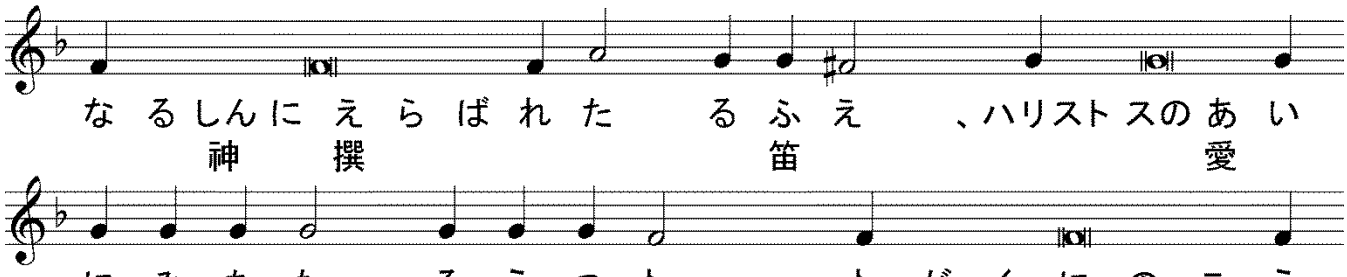


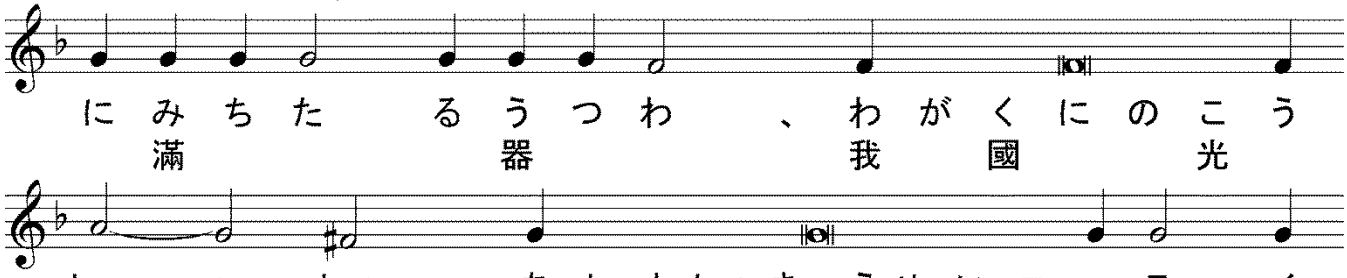
【　日本の亜使徒ニコライの讃詞　第４調　】

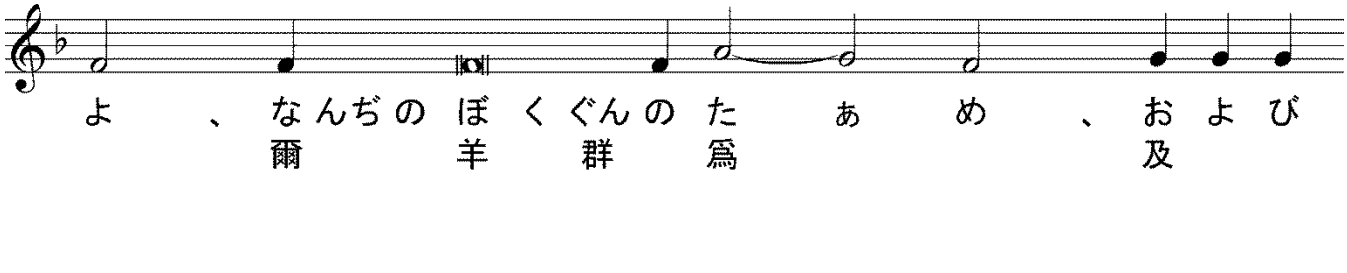


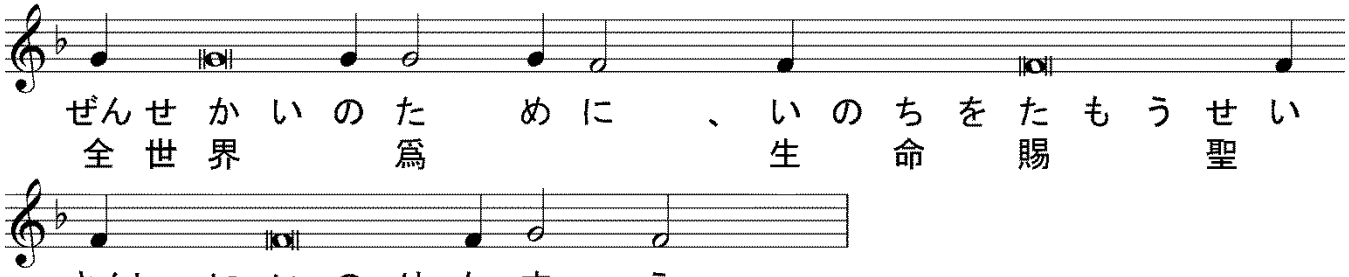




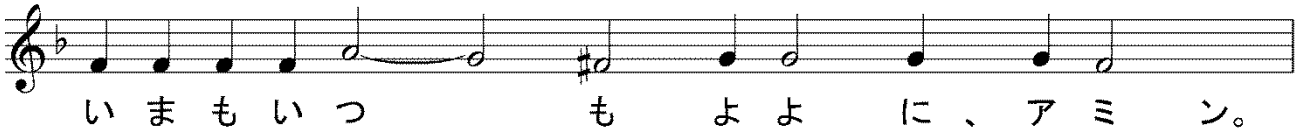


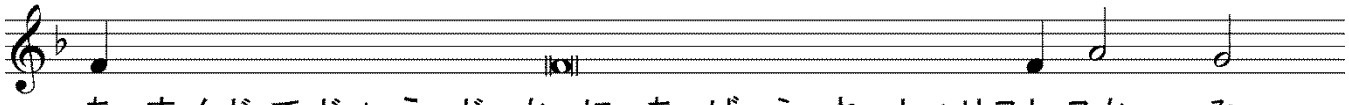


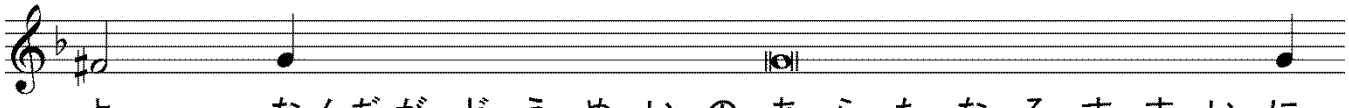


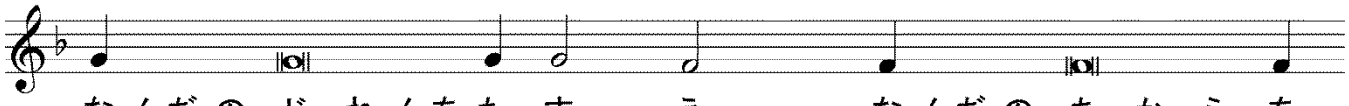


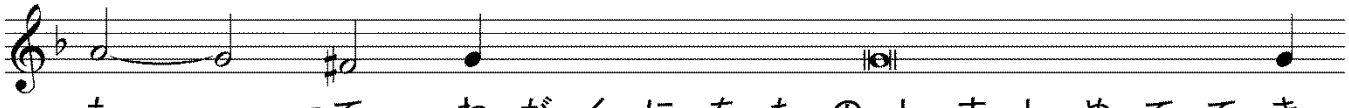
【　十字架擧榮祭の小讃詞　第４調　】

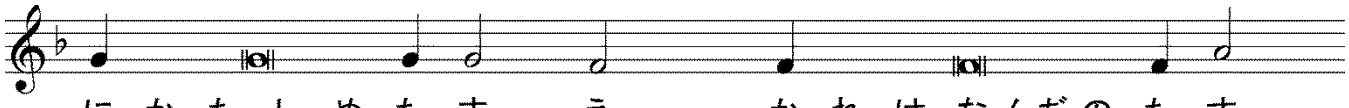


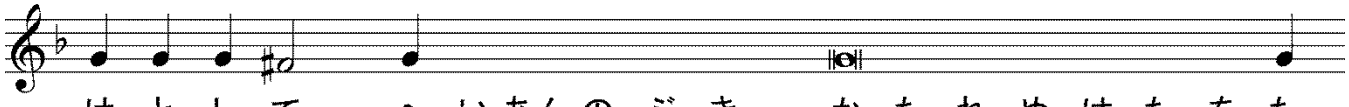


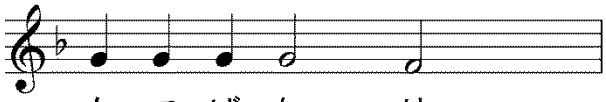








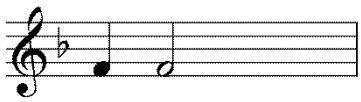




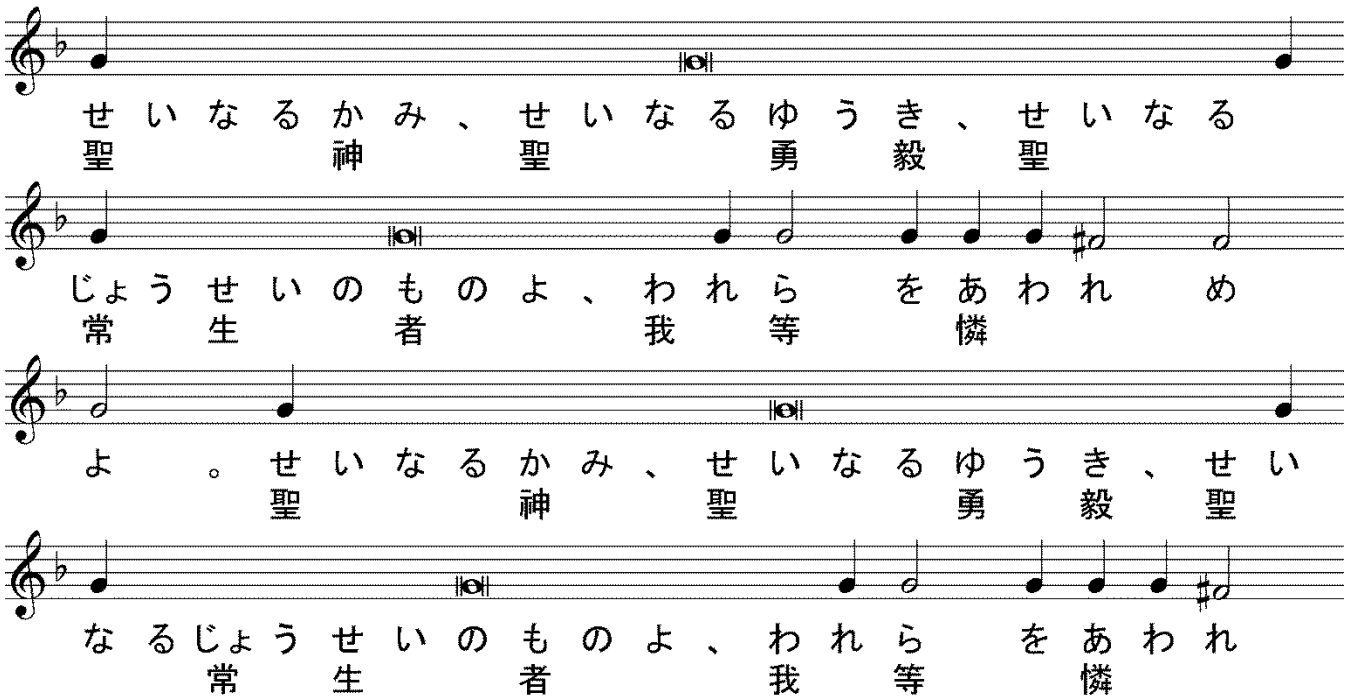
司祭）（　黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

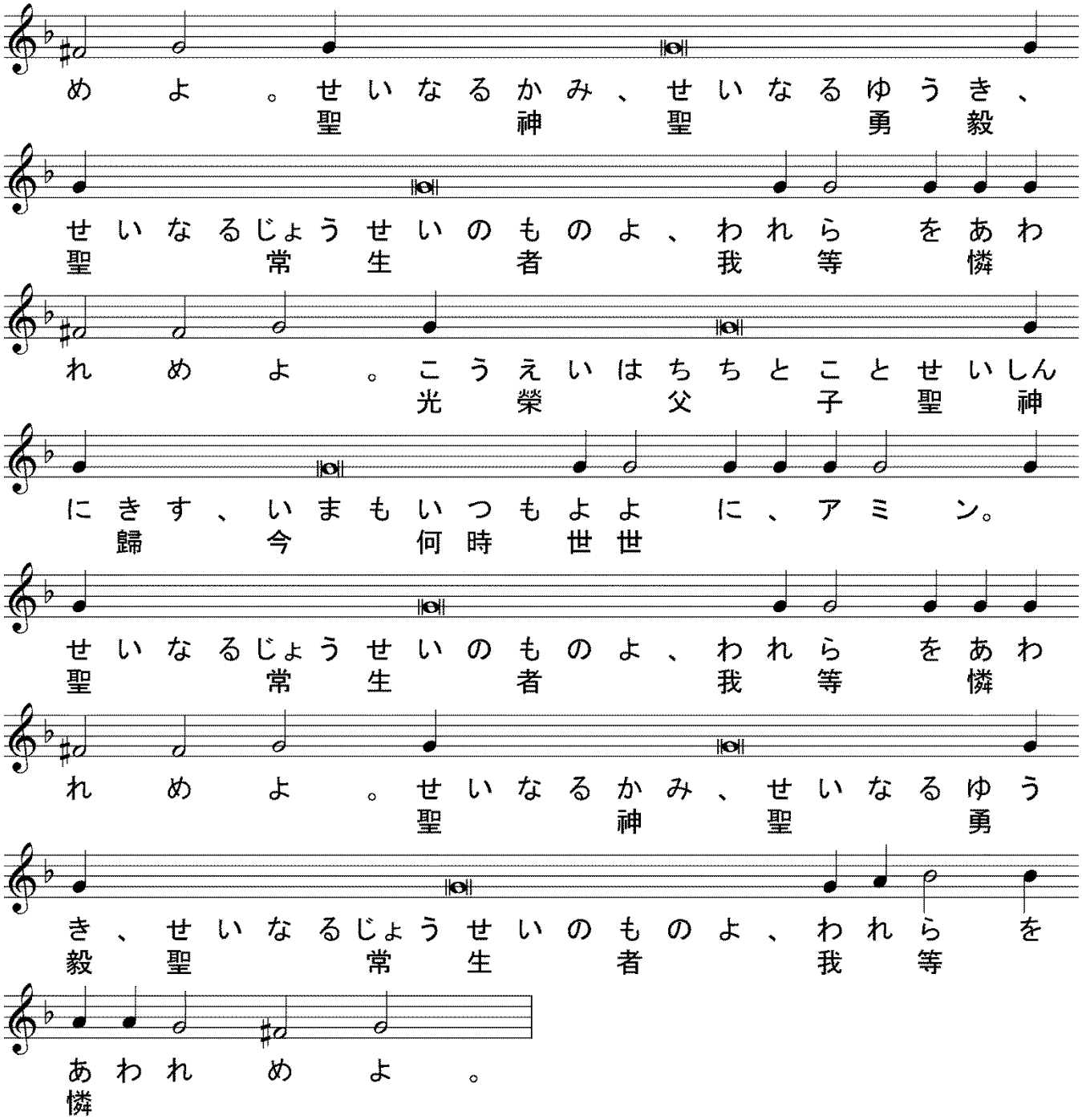
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、）

司祭）蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、



【 聖三祝文 】

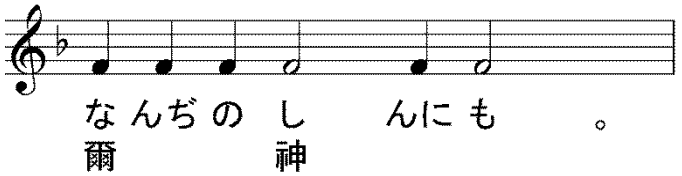




司祭）（ 默誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾 は其 國の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 ）

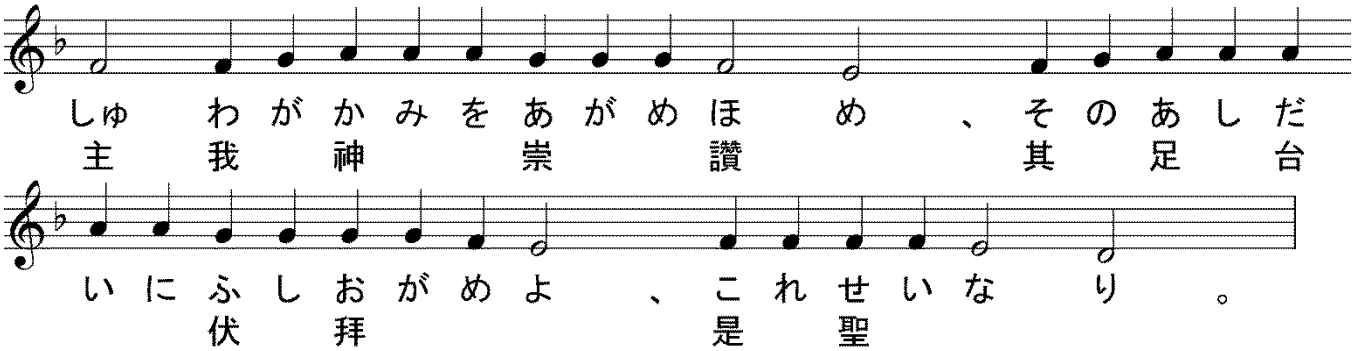
【 十字架擧榮祭の提綱（プロキメン）第７調 】

司祭） 愼 みて聽くべし、衆 人に平 安、

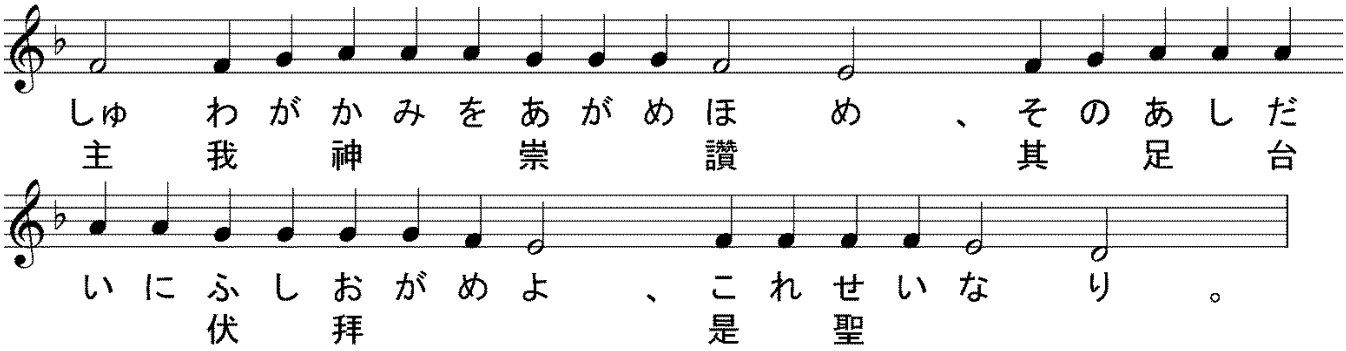


司祭）睿智（えいち）、

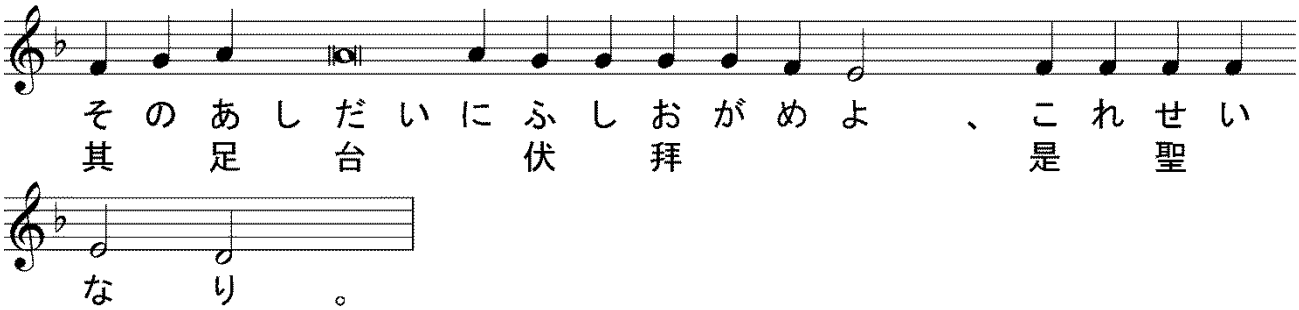
誦經）プロキメン、主（しゅ）、我（わ）が神（かみ）を崇（あが）め讃（ほ）め、其（そのあしだい）足（ふ）凳（おが）に伏し拜めよ、是（こ）れ聖（せい）なり、



誦經）主（しゅ）は王（おう）たり、諸民（しょみんおのの）戰くべし、



誦經）主（しゅ）、我（わ）が神（かみ）を崇（あが）め讃（ほ）め、



【　使徒經（アポストロス）176 端　コリンフ後書 4 章 6～15 節　】

司祭）睿智（えいち）、

誦經）聖使徒（せいしと）パヴェルがコリンフ人（じん）に達（たつ）する後書（こうしょ）の讀（よみ）、

司祭）謹（つつし）みて聽（き）くべし、

誦經）兄弟（けいてい）よ、暗（くらやみ）より光（ひかり）の照（て）ることを命（めい）ぜし神（かみ）は、我等（われら）の心（こころ）を照（てら）せり、イイスス ハリストスの面（おもて）にある神（かみ）の光榮（こうえい）を知（し）る知識（ちしき）を以（もつ）て我等（われら）を輝（かがやか）さん爲（ため）なり。然（しか）れども我等（われら）は

此の寶を土の器に藏む、莫大の能が神に由りて、我等に由らざらん爲なり。我等四方より患難を受くれども、窮せず、險しき境に處れども、望を失わず、窘逐せらるれども、棄てられず、倒さるれども、亡びず。常に身に主イイススの死の狀を佩ぶ、イイススの生命も我等の身に顯れん爲なり。蓋 我等生ける者は、常にイイススの爲に死に付さる、イイススの生命も我等の死すべき肉體に顯れん爲なり。是くの如く死は我等の中に行い、生命は爾等の中に行うなり。然れども錄して、我信ず、故に言えりと、あるが如く、我等も此くの如き信仰の神を有ちて信ず、故に言う、主イイススを復活せしめし者は、イイススを以て我等をも復活せしめ、且爾等と偕に己の前に立たしめんことを知るに因る。蓋萬事は爾等の爲なり、豐かなる恩寵が、多くの人の感謝に由りて、神の光榮の溢るるを致さん爲なり。

＊＊

（比較用　口語訳）

「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである。こうして、死はわたしたちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのである。「わたしは信じた。それゆえに語った」としるしてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じている。それゆえに語るのである。それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ、そして、あなたがたと共にみまえに立たせて下さることを、知っているからである。すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。

＊＊

【　使徒經（アポストロス）203 端　ガラティヤ書 2 章 16～20 節　】

司祭）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがガラティヤ人に達する書の讀、

司祭）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、人は律法の行に由るに非ず、唯イイスス ハリストスを信ずるに由りて義とせらるるを知りて、我等もハリストス イイススを信ぜり、ハリストスを信ずるに由り、律法の行に由らずして、義とせられん爲なり、蓋律法の行に由りては、人一も義とせらるるなし。若し我等ハリストスに由りて義とせられんことを求めて、自も猶罪人たらば、豈ハリストスは罪の役者たるか。非らず。蓋若し我が毀ちたる者、我復之を建てば、則己の罪人たるを示すなり。我律法に由りて律法の爲に死せり、神の爲に生きん爲なり。我ハリストスと共に十字架に釘せられたり。既に我生くるに非ず、即ハリストスは我の中に生くるなり。我が今肉體に在りて生くるは、我を愛して我が爲に己を捨てし神の子を信ずるに由りて生くるなり。

＊＊

（比較用　口語訳）

人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。しかし、キリストにあって義とされることを求めることによって、わたしたち自身が罪人であるとされるのなら、キリストは罪に仕える者なのであろうか。断じてそうではない。もしわたしが、いったん打ちこわしたものを、再び建てるとすれば、それこそ、自分が違反者であることを表明することになる。わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。

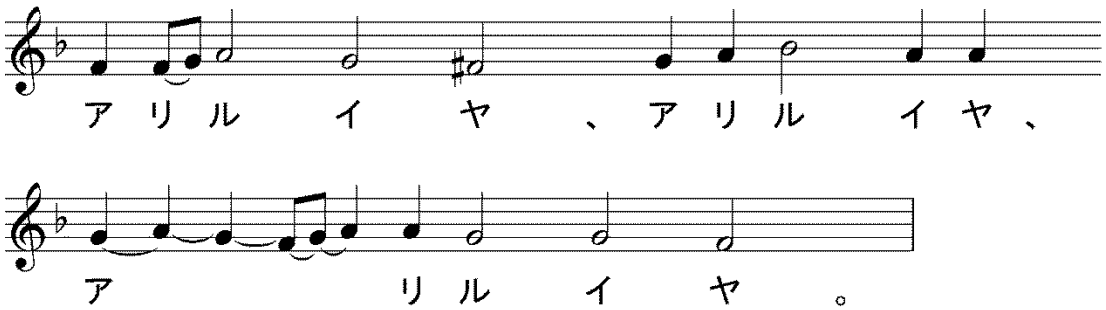
＊＊

司祭）爾に平安、

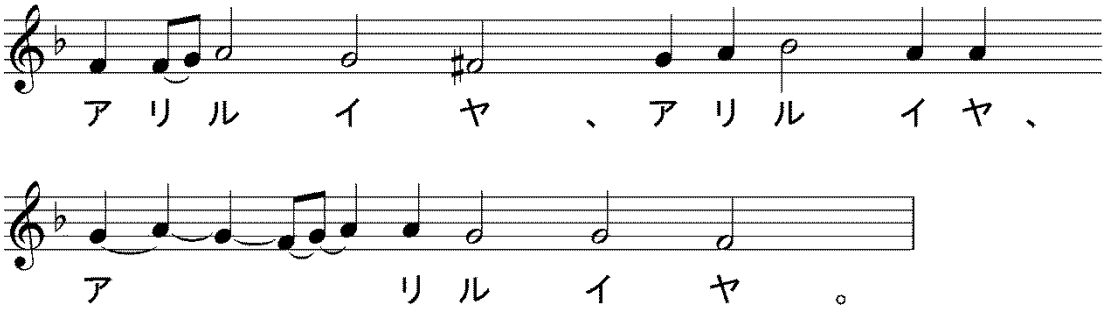
誦經）爾の神にも、アリルイヤ、

【　十字架擧榮祭のアリルイヤ　第１調　】

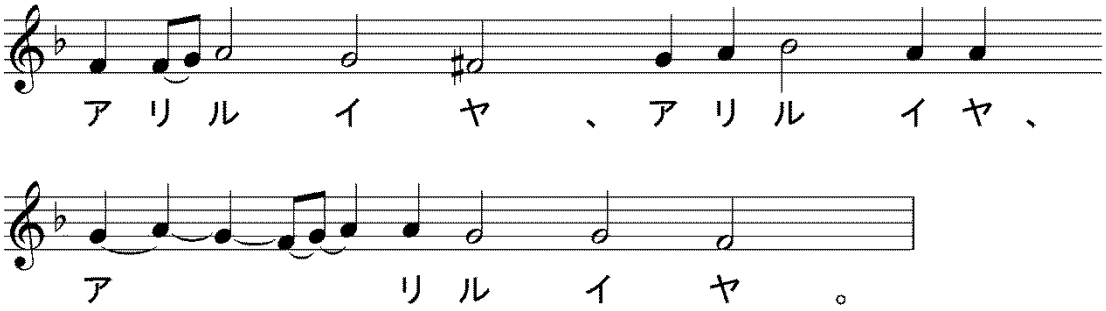
司祭）睿智、



誦經）爾(なんぢ)が古(いにしえ)より獲(え)たる會(かい)を記憶(きおく)せよ、



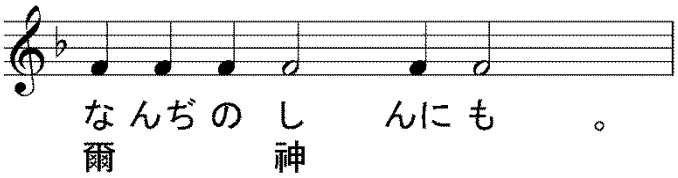
誦經）神(かみ)、我(わ)が古世(こせい)よりの王(おう)は救(すくい)を地(ち)の中(なか)に作(な)せり、



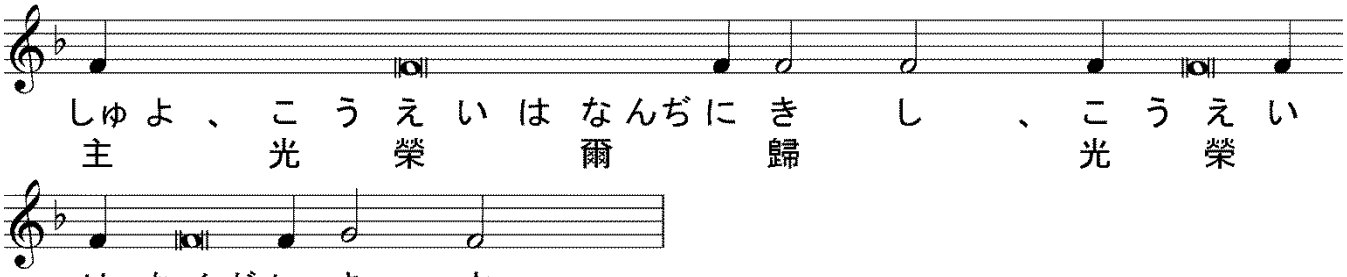
司祭）（　黙誦: 人(ひと)を愛(あい)する主宰(しゅさい)よ、我(わ)が心(こころ)に神(かみ)を知(し)る智慧(ちえ)の浄(いさぎよ)き光(ひかり)を輝(かがや)かし、我(わ)が思念(しねん)の目(め)を啓(ひら)きて、爾(なんぢ)が福音(ふくいん)の教(おしえ)を悟(さと)らしめ給(たま)え、我(わ)が衷(うち)に爾(なんぢ)の福(ふく)たる誡(いましめ)を畏(おそ)るる畏(おそれ)をも入(い)れて、我等(われら)が悉(ことごと)くの肉體(にくたい)の慾(よく)を踏(ふ)み、凡(およ)そ爾(なんぢ)の喜(よろこ)ぶ所(ところ)を思(おも)い且(か)つ行(おこな)いて、属神(ぞくしん)の生活(せいかつ)を過(す)ぐるを致(いた)させ給(たま)え、蓋(けだし)ハリストス神(かみ)よ、爾(なんぢ)は我(わ)が靈(たましい)と體(からだ)との光照(こうしょう)なり、我等(われらなんぢ)爾(なんぢ)と爾(なんぢ)の無原(むげん)の父(ちち)と至聖至善(しせいしぜん)にして生命(いのち)を施(ほどこ)す爾(なんぢ)の神(しん)とに光榮(こうえい)を獻(けん)ず、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、アミン。　）

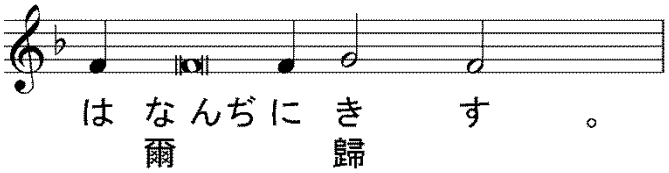
【　福音經（エヴァンゲリオン）　マトフェイ福音書87端　21章33～42節　】

司祭）睿智(えいち)、粛(つつし)みて立(た)て聖福音經(せいふくいんけい)を聽(き)くべし、衆人(しゅうじん)に平安(へいあん)、



司祭）マトフェイ傳の聖福音經の讀、





司祭）謹みて聽くべし、

司祭）彼の時一人の律法師彼を試みて、問いて曰えり、師よ、律法の中に何の誡か大なる。イイスス之に謂えり、爾心を盡し、靈を盡し、意を盡して、主爾の神を愛せよ、此れ誡の第一にして大なる者なり。第二は是に同じき者、即爾の鄰を愛すること己の如くせよ。斯の二の誡には悉くの律法と預言者と繫れり。ファリセイ等の集りし時、イイスス之に問いて曰えり、爾等ハリストスの事を如何に意うか、彼は誰の子なるか。曰く、ダヴィドの子なり。彼曰く、然らば如何ぞダヴィドは、聖神に由りて、彼を主と稱うる、云く、主我が主に謂えり、爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れと。然らばダヴィド彼を主と稱うれば、如何ぞ彼は其子たる。一人も之に言を答うる能わず、是の日より敢て復彼に問う者なかりき。

＊＊

（比較用　口語訳）

ひとりの律法学者が、イエスをためそうとして質問した、「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」。パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。このように、ダビデ自身がキ

リストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。

＊＊

【　福音經（エヴァンゲリオン）　マルコ福音書37端　8章34〜9章1節　】

司祭）マルコ傳の聖福音經の讀、謹みて聽くべし、

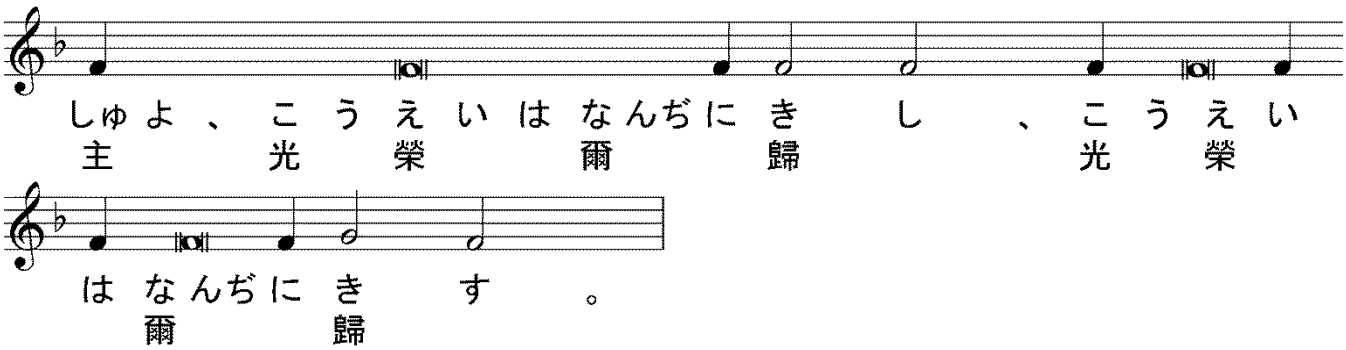
司祭）主曰えり、我に從わんと欲する者は、己を舍て、其十字架を負いて我に從え。蓋己の生命を救わんと欲する者は、之を喪わん、我及び福音の爲に己の生命を喪わん者は、之を救わん。蓋人若し全世界を獲とも、己の靈を損わば、何の益かあらん。抑人何を與えて、其靈の償と爲さんや。蓋此の姦惡の世に於て、我及び我の言を恥ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖なる天使等と偕に來らん時彼を恥ぢん。又彼等に謂えり、我誠に爾等に語ぐ、此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、神の國が權能を以て來るを見んとする者あり。

＊＊

（比較用　口語訳）

主は彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。邪悪で罪深いこの時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。

＊＊



※聖体礼儀③　へ